茨城大学ダイバーシティ推進室

NEWS LETTER

2023/11

vol.27

茨城大学
Ibaraki University

茨城大学
ダイバーシティ推進室
Office of Equality and Diversity

CONTENTS

・ヒューマンライフシンポジウム2023を開催しました

開催報告
ヒューマンライフシンポジウム2023を開催しました

9月17日に水戸市を主催としたシンポジウムを開催しました。（茨城大学、常磐大学・常磐短期大学、茨城キリスト教大学　共催）

会場となった本学講堂には、本学学生、水戸市内の高校生などを含め、事前申込みをした参加者422名がオンサイトで参加し、その模様は同日にオンラインでも68名に配信されました。

第1部では、「SDGsから日本の未来を見る」をテーマとし、ジャーナリストの池上彰氏の基調講演が行われ、学生や多くの参加者も聴講し、報道の最前線で活躍する池上氏の講演に耳を傾けました。

また、第2部では、〖激論！池上彰氏×大学生「若者はなぜ怒らない？」〗と題し、池上氏と茨城大学・常磐大学・茨城キリスト教大学の学生とのディスカッションを行いました。

ジャーナリスト　池上 彰 氏

会場の様子

第1部　基調講演「SDGsから日本の未来を見る」

茨城大、常磐大・常磐短期大、茨城キリスト教大の学生500人アンケート結果の報告

ディスカッションの様子

第2部　大学生とのディスカッション

激論！池上彰氏×大学生「若者はなぜ怒らない？」

シンポジウムの企画・運営に携わった本学人文社会科学部村上信夫ゼミナールの学生のレポートをご紹介します。
企画段階から全体の進行、議論の内容・方法、当日の運営まで事細かに考え、本学関係者だけでなく主催の水戸市・池上氏サイドと、また共催の常磐大学・茨城キリスト教大学の学生とも重ねて打合せをしたうえで実施し、池上氏からもとても良く企画できていたという感想をいただきました。

学生レポート

「無気力を、もうやめよう」
人文社会科学部村上信夫ゼミ3年　刑部香歩

「あなたは今、幸せですか？」「現在の日本に満足していますか？」「では、日本の将来は？」答えは、「私自身は多分幸せだと思う、けど、日本ってなんとなくこの先衰退していく気がする」だ。おそらく、多くの学生が同じ回答をするだろう。**みんな、なんとなく幸せでなんとなく将来への不安を抱えている。**しかし、ここで私が一番問題だと感じたのは、**質問されて初めて、今の自分の状況や日本の状況を考えたことだ。**

「池上彰さんが水戸で講演会をするので、学生との議論の内容を考えてほしい」この依頼を受けた時、突然現れた大きな機会、チャンスにわくわくした。池上彰さんと学生が、どのようなことを話していたら面白いか。池上さんに何を聞きたいか。たくさん考えた。「どうせなら、私が疑問に感じていることをぶつけよう！」そう思ったタイミングで、「絶望の国の幸福な若者たち」という本の存在を知った。本の内容は、**「現代の日本の若者は不幸だと叫ばれている中、当の本人たちは現在の生活に満足し、幸せだと感じている。しかし、別の調査では不安があると答えており、若者の傾向は「幸せ」と同時に「不安」を抱えている」**というもの。これを見つけ、村上先生に相談すると、「若者は何に対して不安を抱いているの？」と聞かれた。確かに、私たち若者が幸せと感じながらも将来に抱く不安とは何なのだろう。現在の大学生は自分自身の現状、日本の現状をどう思っているのか、どんな不安を抱えているのか、**そのリアルな実態を探るべく、3大学の500人規模のアンケート**を実施することになった。

回答を集約すると、本の通り、**「幸せ」と「不安」を同時に感じている大学生の実態が見えてきた。**具体的な不安の中身は、将来、貧困に陥るかもしれないということ。そして、その不安を抱えながらも、「行動の仕方がわからない」と言って何もしない残念な学生の姿が浮き彫りになった。私もまったく同じ、**行動しない若者、自分たちが将来を不安に思う国や現状に“怒らない若者”**だ。無気力で、考えることも、動くこともしない。

講演会で池上さんが言っていた**「私たち世代は若いとき、たくさん大人に怒っていましたよ」**という言葉にどきっとした。このまま将来に期待せず、なんとなく今を生きているだけでいいのか。今が幸せと感じるのは良いこと。しかし、だからと言って周りの状況、日本の将来に無関心でいいわけが無い。アンケートや講演会を通して、**今の自分の無関心さを反省するとともに、考え、行動するべきだ**という思いを持つことが出来た。会場にいた多くの学生の皆さんも、私と同じように思ってくれていたら嬉しい。

池上氏と人文社会科学部村上信夫教授、ゼミナールの学生

ディスカッションの様子

茨城大学・常磐大学・茨城キリスト教大学
ディスカッション参加の学生

「未来を信じる」
人文社会科学部村上ゼミ４年　丹羽仁菜

就職活動中、私は不安だった。どんどん他の人が進路を決めていくなか、自分の将来がまったく想像できないでいたのだ。今回のテーマである**「見えない貧困」と「見えてきたジェンダー」**。これらは、就職活動をしているときに抱いていた不安の根っこにあるものだった。

第1部の基調講演。私は、池上さんの時代の大学卒の女性の話が印象に残っている。「アフリカや中米で活躍しているのは、ほぼ女性」。50年前は、「短大がちょうどいい」と言われ、「職場の華」としてしか見られていなかった。**「本当に優秀な女性が日本で活躍できる場がなかった」**。池上さんの言葉が胸に刺さった。そういえば、私が高校に合格したときに、曾祖母が喜んでくれたことを思い出した。のちのち知ったが、私の学校は曾祖母が憧れていた学校だった。文学が好きで、表彰されるくらいに詞や短歌が得意な人だった。きっと、今の時代に生まれていたら違う人生だったのだろう。結婚や出産、育児。男性と同じように女性が働き続けるのはまだまだ難しい。でも、高校や大学へさえも行くことができなかった時代と比べたら、前進している。**きっと、数十年後には女性が働くことも普通になっていると信じたい**と思った。

第2部の学生との討論。**無意識のうちに相対的貧困に陥っているのは、これまでの安定したルールが崩れていっているから**だという話があった。就職活動をしていても、それは実感する。転職を見据えて就職活動をしている人も少なくないからだ。これまでは会社で働いていさえすれば、困ることはなかった。しかし、今は通用しない。終身雇用や年功序列型賃金は見る影もなく、大企業であっても倒産の危機がある。だから、**自分自身の生き方を自分で決めなければいけない**のだ。会社の力ではなく、個人の力で生きていく。この考え方は、自己責任論に通じるものがあるのかもしれない。私は、先が見えない将来を、自分1人の力で生きていくことに不安を感じていたのだ。しかし、**「不安に思うのは当たり前だと居直ってほしい」**という池上さんの言葉に救われた。池上さんの時代は就活生に、銀行、石炭業界、製糖業界が人気だったそうだ。しかし、どれも、今は人気の業界とはいえない。**時代や社会は変わるものなのだ。そして、それを不安に思うのも当然なのだ**と安心した。

最後、池上さんは、**「未来を予想する最良の方法は未来をつくることだ」**と言っていた。この言葉を胸に社会に出ていきたいと思う。これから、どう働くのか。どう生きていくのか。**自分の選んだ道を正解にしていこう**と思った。

シンポジウムを終えて～

池上彰さんの発するメッセージやその届け方、子供から大人まで幅広い人の心に届く話し方に、さすがのプロだなと感動しつつ、だからこそ学生さんたちの率直な思いや意見、沢山の質問が会場内で盛り上がるシンポジウムとなりました。

私は研究者ではないので、あくまでも個人的に感じていることに過ぎないのですが、人は、創造する力をもつ生き物だと思います。想いや形を創造することにワクワクし、生きることを楽しむ、未来を創造することができるのも人なのだと。
また、人は、弱い生き物でもある。命を守り、危険を回避するために、未来に不安や恐れを感じることもできるのだと思います。リアルな世界を自分の目で見ること、受け身ではなく未来を創造すること、不安や恐れを持つことは悪い事ではないけれど、程よいバランスをどう見つけて生きていくか、池上彰さんからは、皆さんそれぞれの形でメッセージを受けたことと思います。

池上彰さんはじめ、このシンポジウム開催にご尽力くださいました、人文社会科学部村上信夫先生、村上ゼミの学生の皆さん、登壇してくださった学生の皆さん、水戸市、常磐大学・常磐短期大学、茨城キリスト教大学の皆さん、参加者皆様に心より感謝申し上げます。

理事（ダイバーシティ・国際・SDGｓ）菊池あしな